

教科に関する調査の結果概要

【小学校】

- ・算数A(知識)及びB(活用)ともに、市平均正答率が全国平均正答率を超え、大きく改善した。国語A(知識)及びB(活用)についても昨年度と比べ改善され、全国平均との差が小さくなっている。
- ・無解答率は全国とほぼ同程度である。正答率40%未満の下位層も平成19年度の調査以来、最も減少しており、特に算数は全国より少ない。

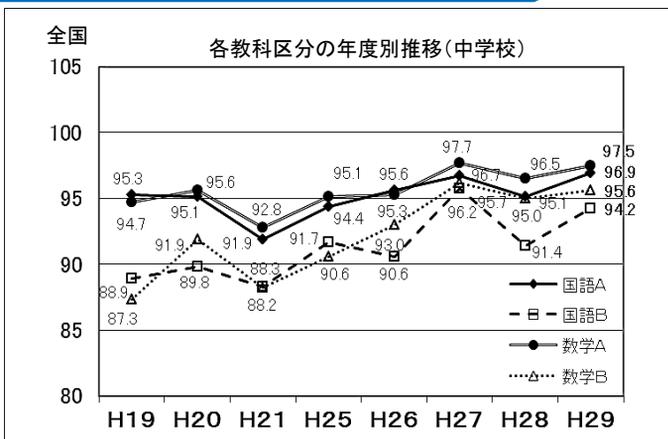
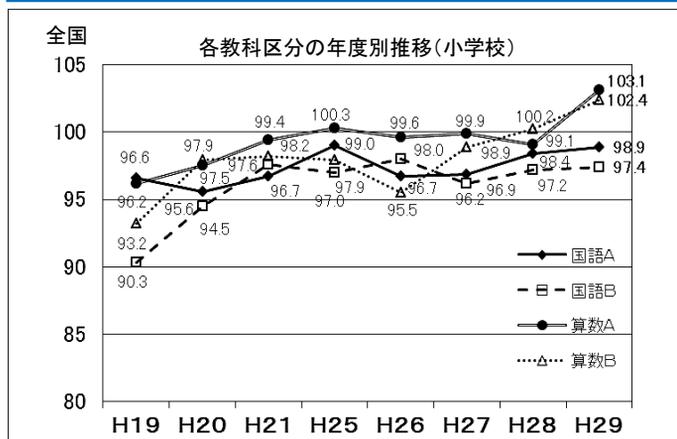
【中学校】

- ・昨年度と比較して、全ての教科区分で改善が見られ、市平均正答率と全国平均正答率との差が小さくなっている。
- ・無解答率は、昨年度と比較して大きく減少し、全国に近づいている。また、正答率40%未満の下位層も平成19年度の調査以来、最も減少しており、全国との差が小さくなっている。
- ・小中学校ともに、「堺版授業スタンダード」等に基づき、学びの質や深まりを重視した授業改善が進められている結果と言える。

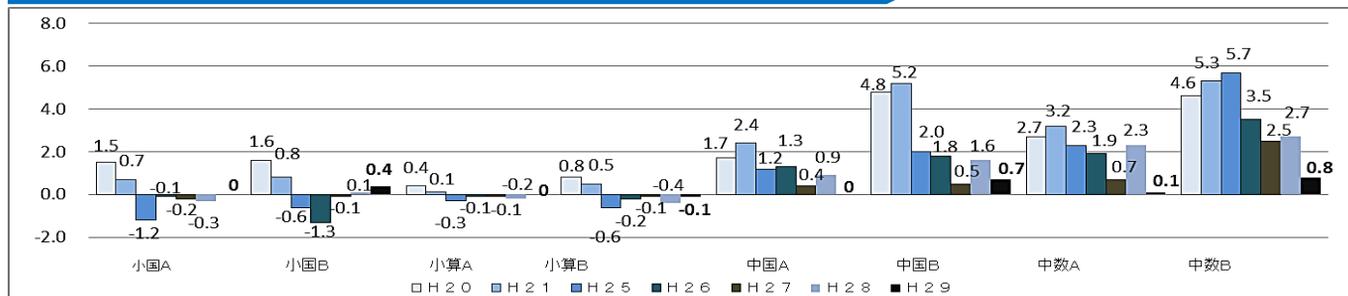
平均正答率の経年比較(全国と堺市)

		H19			H20			H21			H25			H26			H27			H28			H29			
		全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	
小学校	国語	A区分	81.7	78.9	-2.8	65.4	62.5	-2.9	69.9	67.6	-2.3	62.7	62.1	-0.6	72.9	70.5	-2.4	70.0	67.8	-2.2	72.9	71.7	-1.2	74.8	74.0	-0.8
		B区分	62.0	56.0	-6.0	50.5	47.7	-2.8	50.5	49.3	-1.2	49.4	47.9	-1.5	55.5	54.4	-1.1	65.4	62.9	-2.5	57.8	56.2	-1.6	57.5	56.0	-1.5
	算数	A区分	82.1	79.0	-3.1	72.2	70.4	-1.8	78.7	78.2	-0.5	77.2	77.4	+0.2	78.1	77.8	-0.3	75.2	75.1	-0.1	77.6	76.9	-0.7	78.6	81.0	2.4
		B区分	63.6	59.3	-4.3	51.6	50.5	-1.1	54.8	53.8	-1.0	58.4	57.2	-1.2	58.2	55.6	-2.6	45.0	44.5	-0.5	47.2	47.3	0.1	45.9	47.0	1.1
中学校	国語	A区分	81.6	77.8	-3.8	73.6	70.0	-3.6	77.0	70.8	-6.2	76.4	72.1	-4.3	79.4	75.9	-3.5	75.8	73.3	-2.5	75.6	71.9	-3.7	77.4	75.0	-2.4
		B区分	72.0	64.0	-8.0	60.8	54.6	-6.2	74.5	65.8	-8.7	67.4	61.8	-5.6	51.0	46.2	-4.8	65.8	63.0	-2.8	66.5	60.8	-5.7	72.2	68.0	-4.2
	数学	A区分	71.9	68.1	-3.8	63.1	60.3	-2.8	62.7	58.2	-4.5	63.7	60.6	-3.1	67.4	64.2	-3.2	64.4	62.9	-1.5	62.2	60.0	-2.2	64.6	63.0	-1.6
		B区分	60.6	52.9	-7.7	49.2	45.2	-4.0	56.9	50.2	-6.7	41.5	37.6	-3.9	59.8	55.6	-4.2	41.6	40.0	-1.6	44.1	41.9	-2.2	48.1	46.0	-2.1
理科																	60.8	57.7	-3.1							

全国平均正答率を100とした場合の堺市平均正答率 経年比較(H19-H29)



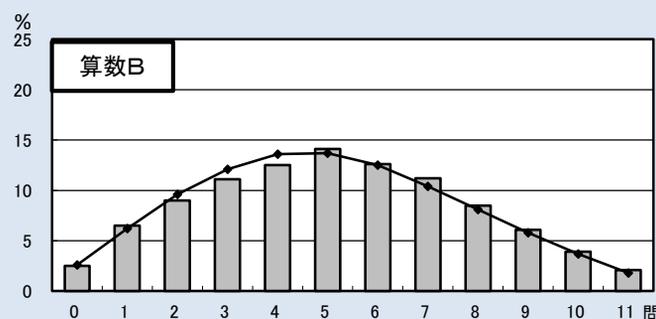
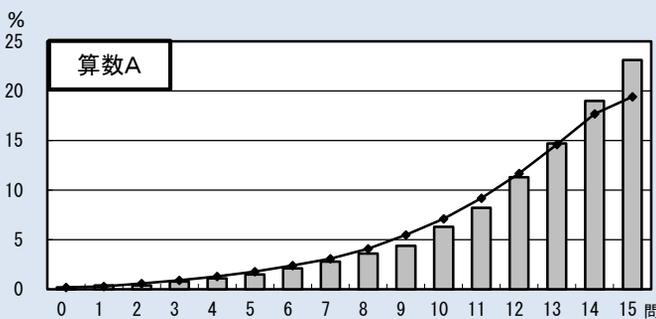
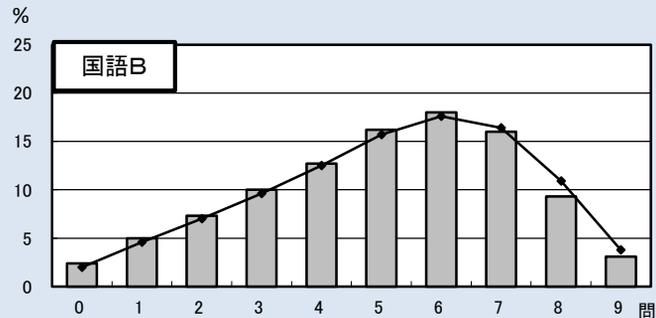
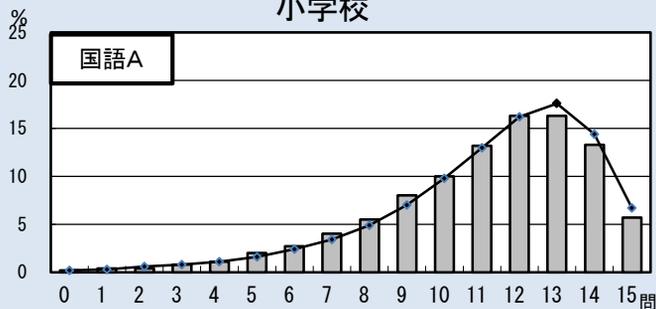
無解答率における全国と堺市の差 経年比較



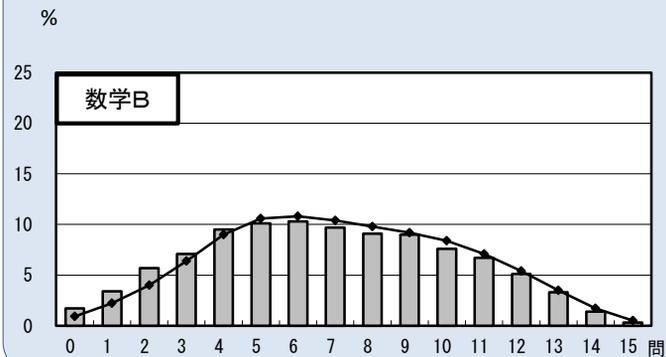
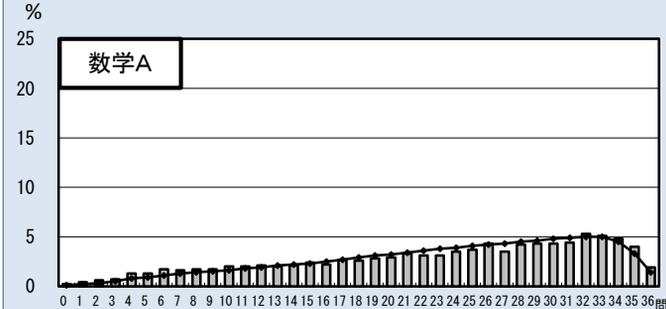
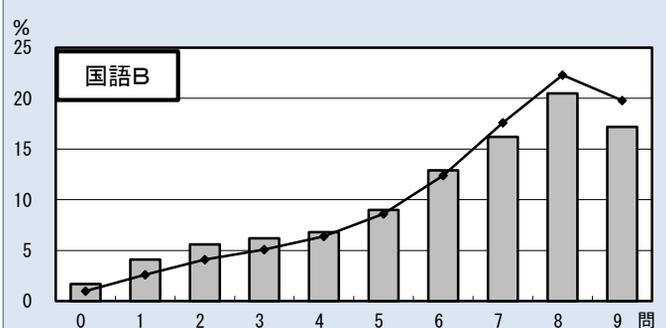
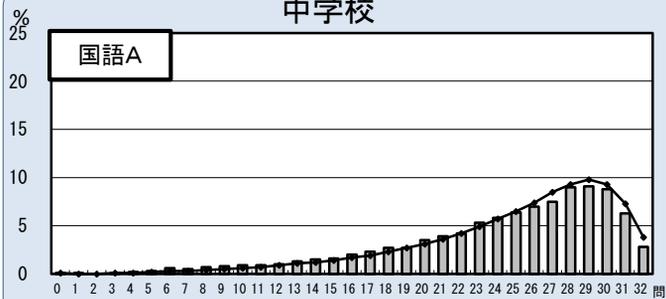
各教科正答数分布 (全国と堺市)

堺市 全国

小学校

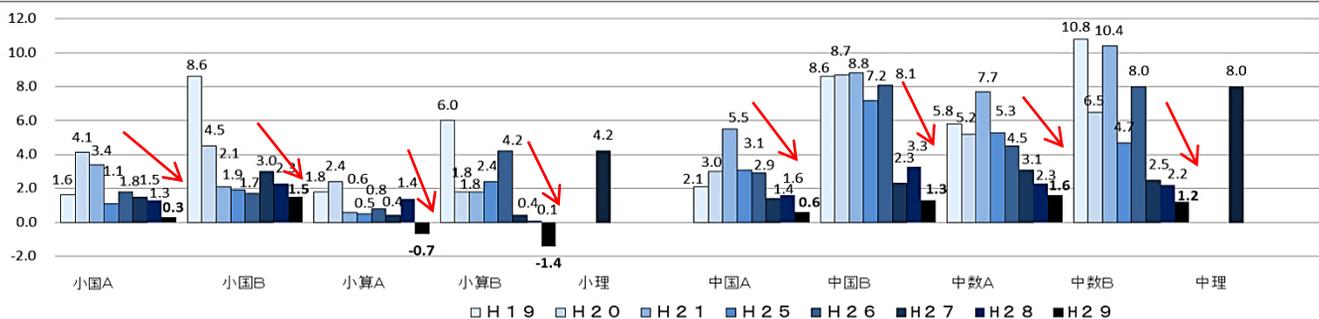


中学校



下位層(正答率40%未満)児童生徒割合の全国・堺市比較

改善

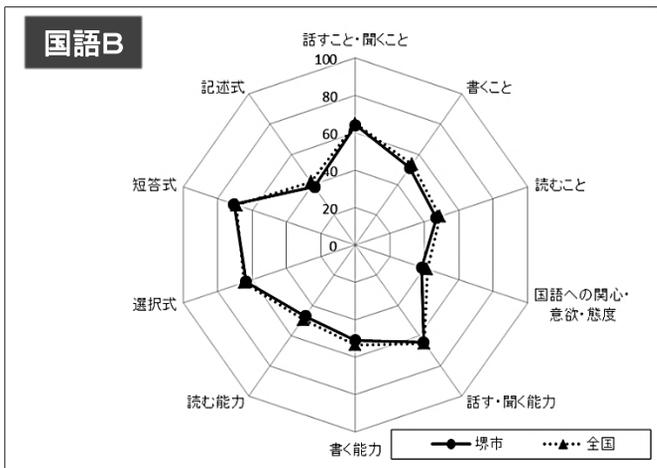
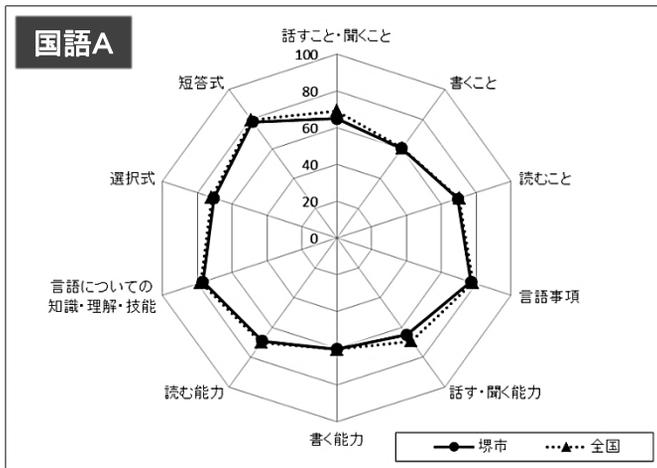


小学校国語

- A問題では、言語事項(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)において比較的正答率が高く、基礎的・基本的な知識の定着を図る取組の成果が表れている。
- B問題では「自分の考えを広げたり深めたりするための発言の意図を捉える」問題で正答率が低く、話し合いの中の発言の意図を捉えることに課題がある。
- B問題では「記述式」に関する問題の正答率が低く、資料から必要な情報を取り出し、整理して自分の考えをまとめることに課題がある。

領域・観点・問題形式別の結果 (全国と堺市)

分類	区分	A問題(15問)			B問題(9問)		
		対象設問数	平均正答率(%)		対象設問数	平均正答率(%)	
			堺市	全国(公立)		堺市	全国(公立)
学習指導要領の領域等	話すこと・聞くこと	1	65.0	69.2	3	64.2	64.9
	書くこと	2	60.3	60.6	5	51.1	53.4
	読むこと	3	69.3	70.2	3	47.0	49.2
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	11	76.9	78.0	0	—	—
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	0	—	—	3	38.5	41.7
	話す・聞く能力	1	65.0	69.2	3	64.2	64.9
	書く能力	2	60.3	60.6	5	51.1	53.4
	読む能力	3	69.3	70.2	3	47.0	49.2
	言語についての知識・理解・技能	11	76.9	78.0	0	—	—
問題形式	選択式	9	70.6	71.7	5	63.6	64.6
	短答式	6	78.2	79.4	1	70.5	69.2
	記述式	0	—	—	3	38.5	41.7



■AB問題ともに、概ね全国と同様の傾向が見られ、特に、B問題の「記述式」の問題において自分の考えをまとめ、書き表すことに課題がある。

今後の取組

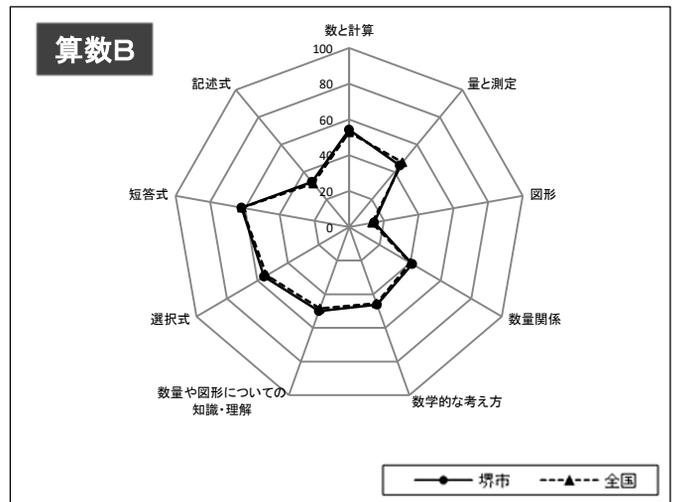
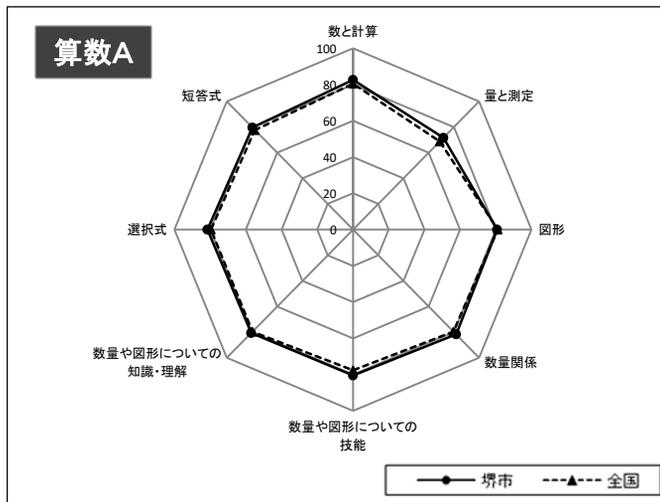
- 「読むこと」の学習において自分の考えを話し合うとき、「どこからそう思うの」と質問したり、相手の考えに対する、自分の理解が正しいかどうかを確かめるために、「〇〇さんの言いたいことはそういうことなの」と質問したりするなど互いに補完し合うことによって、自分の考えを広げたり深めたりすることができるように指導する。
- 目的や意図に応じて、取材の内容や方法を工夫し、書く事柄を収集したうえで、その中から、具体的な事実と自分の感想、意見などを区別しながら必要な内容を整理して書くことができるように指導する。

小学校算数

- A問題では、全国平均を上回り、基礎的・基本的な内容の定着を図る取組が確実に進んでいる。
- B問題では、全国平均を超え、言葉、数、図や表と関連づけて説明する指導を丁寧に行った成果が表れている。
- 数と計算の領域である「小数の計算」に関する問題が、引き続き課題である。
- 他者の考え方や解決方法を理解すること、論理的に考えを進めて説明することに課題がある。

領域・観点・問題形式別の結果（全国と堺市）

分類	区分	A問題（15問）			B問題（11問）		
		対象 設問数	平均正答率(%)		対象 設問数	平均正答率(%)	
			堺市	全国（公立）		堺市	全国（公立）
学習指導要領 の領域	数と計算	8	82.7	80.6	5	54.3	52.8
	量と測定	2	71.7	68.8	2	44.8	47.0
	図形	2	80.7	81.1	1	14.4	13.2
	数量関係	5	81.8	79.6	8	41.4	40.0
評価の観点	算数への関心・意欲・態度	0	—	—	0	—	—
	数学的な考え方	0	—	—	9	46.3	45.4
	数量や図形についての技能	8	80.5	77.7	0	—	—
	数量や図形についての知識・理解	7	80.7	79.7	2	50.1	48.6
問題形式	選択式	7	81.6	79.6	3	55.6	54.1
	短答式	8	79.7	77.8	3	62.0	61.7
	記述式	0	—	—	5	32.8	31.6



- A問題の「量と測定」領域、B問題の「数と計算」領域については、良好な結果となっている。
- B問題の「図形」領域や記述式問題の正答率が低い。

今後の取組

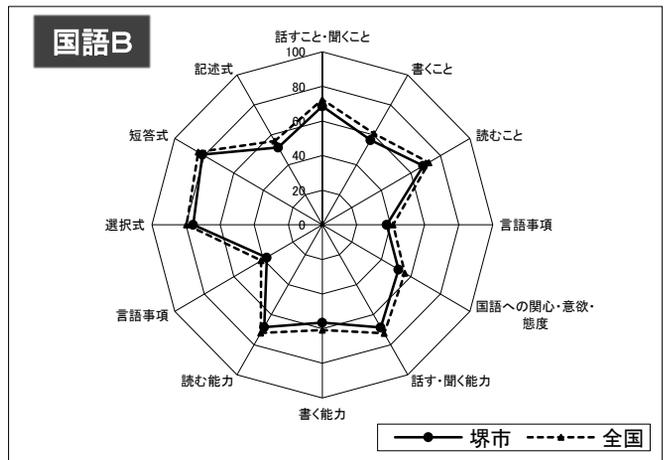
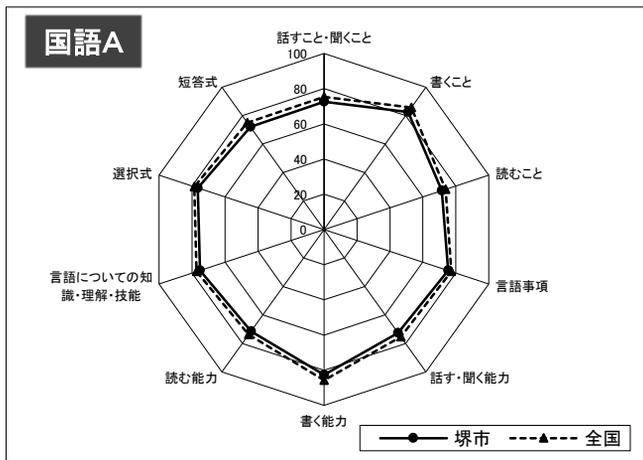
- 図形の学習においては、構成・分解などの活動を通して、図形の性質を見いだすことにより、その性質について理解を深めることができるようにする。
- 領域や内容の系統性もふまえ、堺版授業スタンダードによる問題解決的な学習の充実や適用題を位置付けた展開の充実を図る。
- ある事柄が成り立つことの原因や判断の理由等について、論理的に説明したり、判断や考えの正しさを説明したりする活動を行う。

中学校国語

- 昨年度に比べ、A・B問題ともに全国平均との差が縮まった。特に、「漢字を正しく読む」問題や「古典作品の種類を選択する」問題は全国平均と同程度であり、言語についての知識・理解の定着に成果が見られる。
- A問題では、言語事項(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)の「事象や行為などを表す多様な語句について理解する」問題、「楷書と行書の違いを理解する」問題に課題が見られる。
- B問題では、書くこと・読むこと・言語事項の3つの領域にまたがる「表現の仕方について捉え、自分の考えを書く」問題に課題が見られる。

領域・観点・問題形式別の結果 (全国と堺市)

分類	区分	A問題(32問)			B問題(9問)		
		対象設問数	平均正答率(%)		対象設問数	平均正答率(%)	
			堺市	全国(公立)		堺市	全国(公立)
学習指導要領の領域等	話すこと・聞くこと	4	72.6	75.4	3	68.5	72.4
	書くこと	4	82.5	85.7	4	56.6	60.8
	読むこと	6	71.4	73.8	4	68.3	72.1
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	18	75.2	77.2	1	37.7	41.4
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	0	—	—	3	51.6	55.9
	話す・聞く能力	4	72.6	75.4	3	68.5	72.4
	書く能力	4	82.5	85.7	4	56.6	60.8
	読む能力	6	71.4	73.8	4	68.3	72.1
	言語についての知識・理解・技能	18	75.2	77.2	1	37.7	41.4
問題形式	選択式	22	76.4	78.5	5	75.7	79.6
	短答式	10	72.1	75.1	1	81.2	84.1
	記述式	0	—	—	3	51.6	55.9



■A・B問題ともに、概ね全国と同様の傾向が見られる。全国平均の差が大きいのは、A・B問題ともに書くことの領域であり、昨年度に引き続き課題となっている。

今後の取組

- 様々な場面や目的に応じた適切な言葉について考えたり、調べたりするとともに、それらの言葉を実際に使う場面を効果的に設定する。
- 毛筆を使用する書写の指導と硬筆を使用する書写の指導との割合を適切に設定するとともに、楷書と行書の特徴について理解させ、それぞれの特徴に留意して文字を書かせる。また、どのような点に留意して書いたのかを他者と説明し合う学習活動を充実させる。
- 印象に残った場面や描写について、それがどのような内容であるのか、なぜ印象に残ったのかを具体的に説明させる。その際、文章の構成や展開、表現の特徴(比喩など)等の観点について考える活動を充実させる。

中学校数学

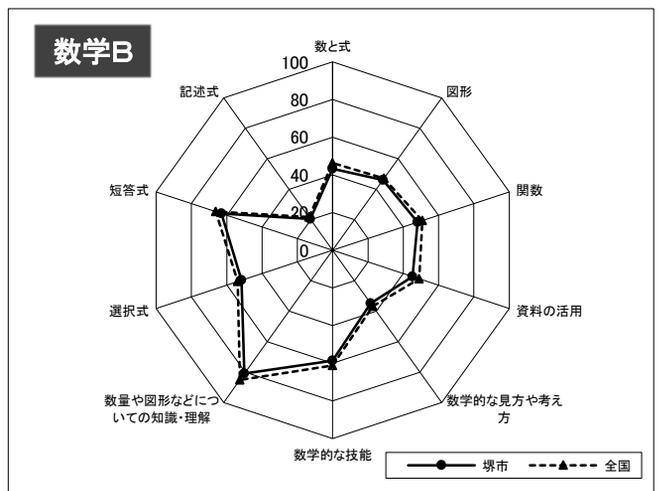
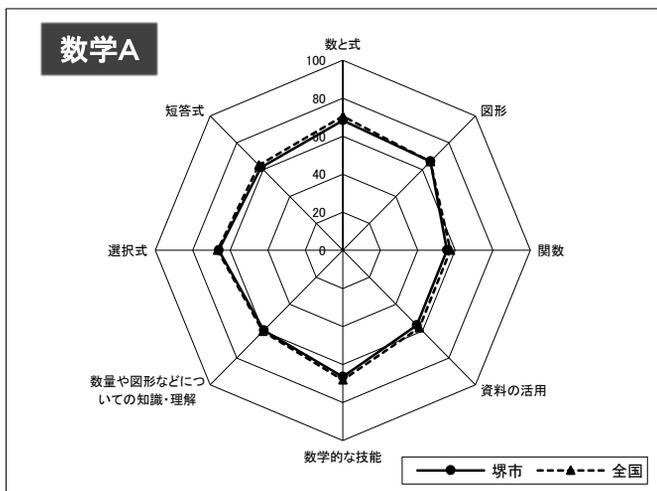
○A・B問題ともに、昨年度に比べ、全国平均との差が縮まった。特にA問題では昨年度課題が見られた図形分野において改善が見られる。

●A問題では数と式の「方程式」に関する問題、関数の「代入の方法」に関する問題や、「変化の割合の理解」に関する問題において課題が見られる。

●B問題では数と式の「与えられた説明の筋道を読み取り、事象を数学的に表現する」問題、資料の活用の「資料の読み取り」に関する問題に課題が見られる。

領域・観点・問題形式別の結果（全国と堺市）

分類	区分	A問題（36問）			B問題（15問）		
		対象 設問数	平均正答率(%)		対象 設問数	平均正答率(%)	
			堺市	全国（公立）		堺市	全国（公立）
学習指導要領 の領域	数と式	12	68.3	70.4	3	43.3	46.3
	図形	12	66.1	66.0	6	46.1	47.1
	関数	8	55.5	57.4	3	48.2	50.8
	資料の活用	4	55.7	57.6	3	45.3	49.1
評価の観点	数学への関心・意欲・態度	0	—	—	0	—	—
	数学的な見方や考え方	0	—	—	10	34.9	36.8
	数学的な技能	20	66.4	68.2	3	58.6	61.2
	数量や図形などについての知識・理解	16	59.5	60.2	2	81.0	85.1
問題形式	選択式	13	66.1	66.8	4	51.7	53.8
	短答式	23	61.7	63.4	6	62.9	66.3
	記述式	0	—	—	5	20.5	21.7



■A・B問題ともに、概ね全国と同様の傾向が見られるが、昨年度と比べ、A問題の「図形」では、全国平均との差が縮まった。一方で、B問題の「関数」「資料の活用」では、全国平均との差が広がり、引き続き課題となっている。

今後の取組

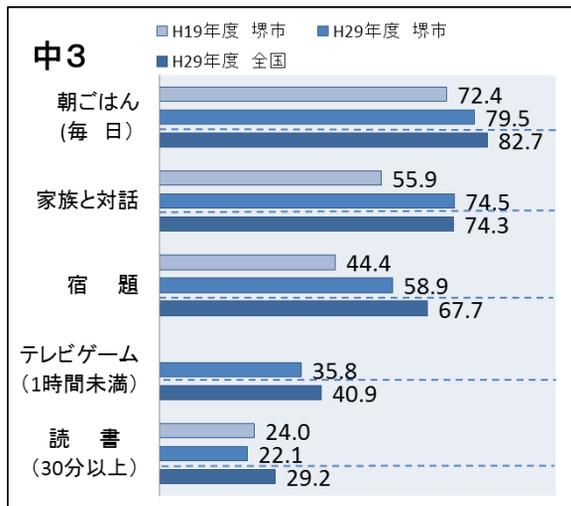
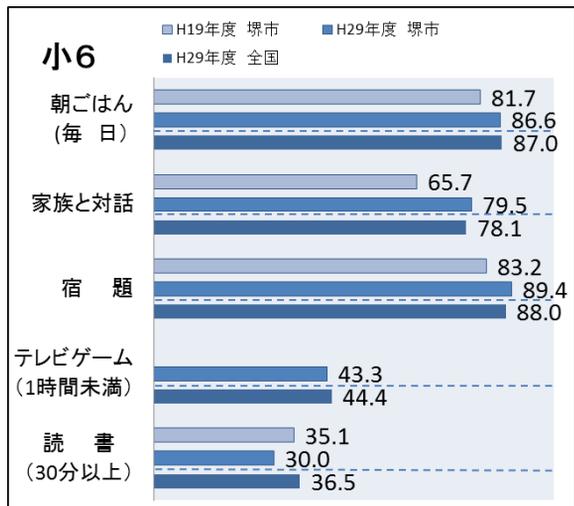
- 数学的な技能の定着が図れるよう、数・式・図・表・グラフ等、数学的な表現を用いて、論理的に考察し表現したり、その過程を振り返って考えを深めたりする学習を設定する。
- 自立的、協働的な活動を通し、数学で得た知識及び技能を用いることや、思考力、判断力、表現力等を発揮する活動を評価し、生徒の学習意欲の向上を図る。

学習・生活状況に関する調査の結果概要

◆家での7つのやくそく ~家族との対話時間は、全国平均を上回るが、時間の使い方に課題~

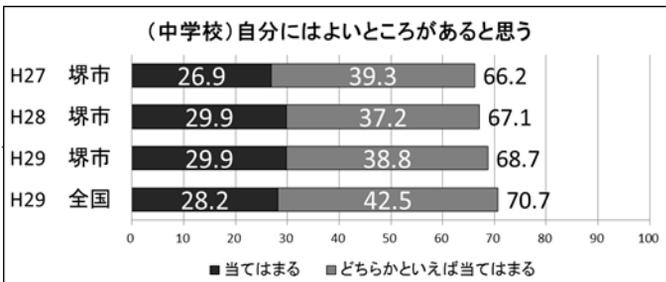
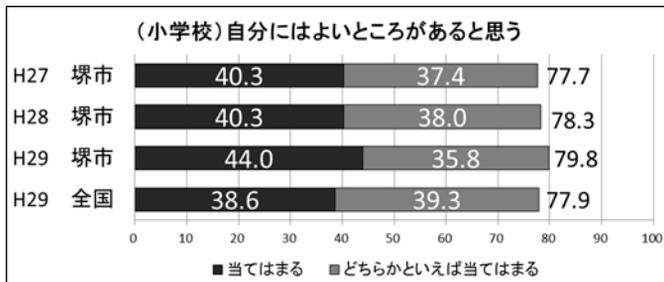
「家庭での対話」に関しては小中ともに全国平均を上回っている。「宿題」に関しては、小学校は家庭学習のびきりや自主学習ノートの取り組みの成果も表れ、全国平均を上回っているが、中学校は依然として全国平均との差が大きい。

また、「テレビゲーム」の時間は、全国平均より多く、「読書」の時間は少ない結果となっている。一層、家庭との連携を強化し、家庭での時間の使い方を見直していく必要がある。



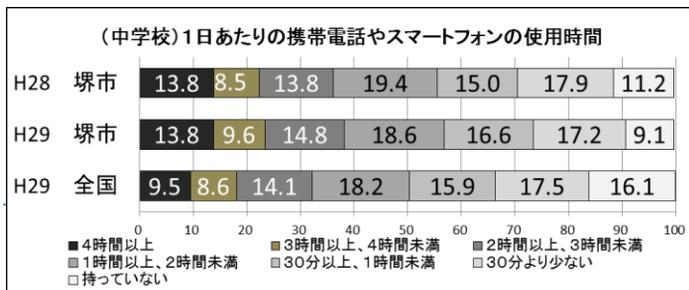
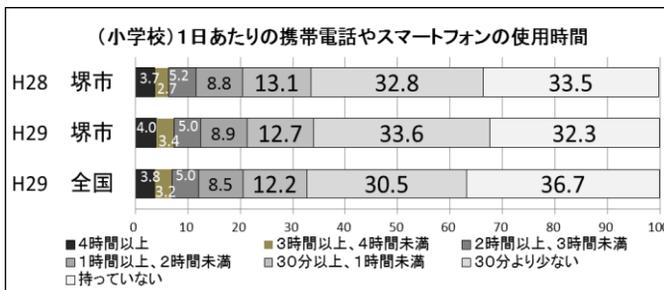
◆自尊感情を育む教育 ~子ども自身が自分の良さを感じられる取組を推進する~

小中学校ともに、自尊感情について全体的にさらなる改善がみられた。「自分にはよいところがあると思う」の項目では、肯定的回答の児童生徒の割合が小学校では、全国平均を上回っている。引き続き、各校のこれまでの取組をさらに推進し、教育活動全般を通して、子どものよさを伸ばし、それを子ども自身が感じられるような実践を進めていく。



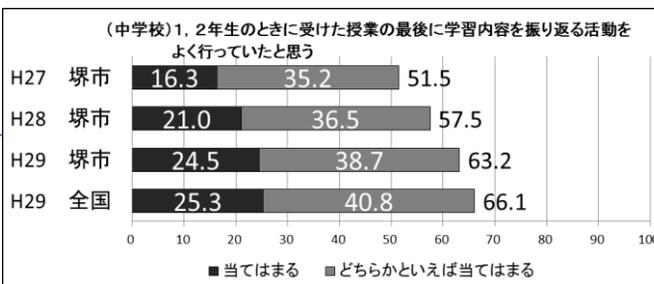
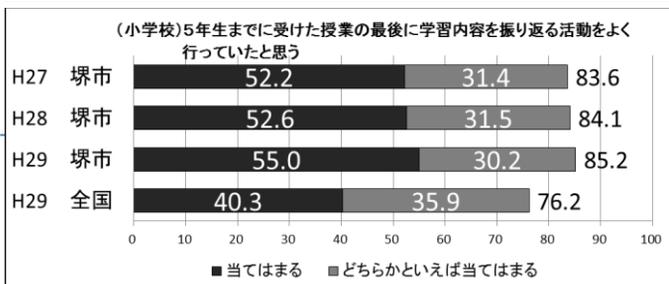
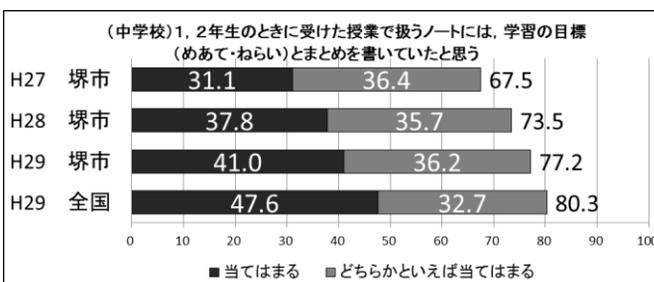
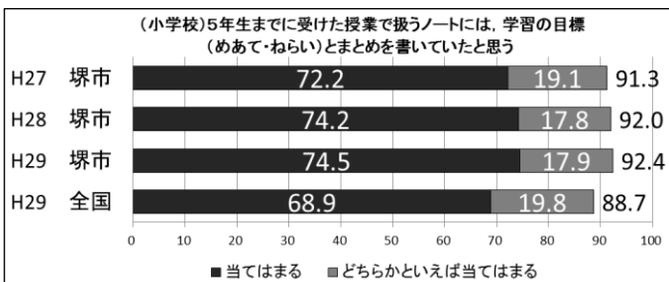
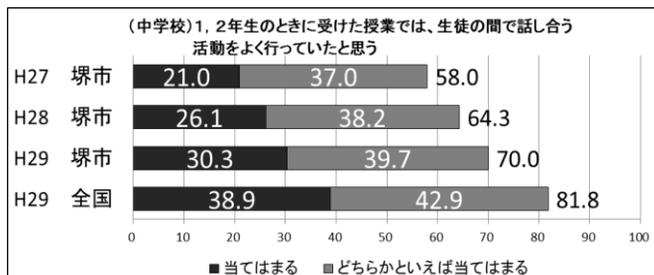
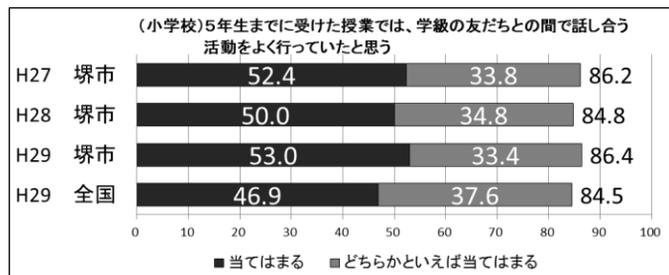
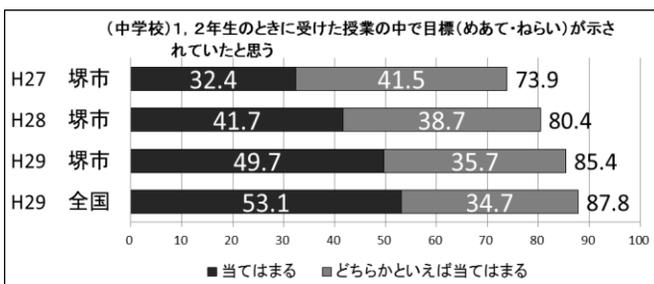
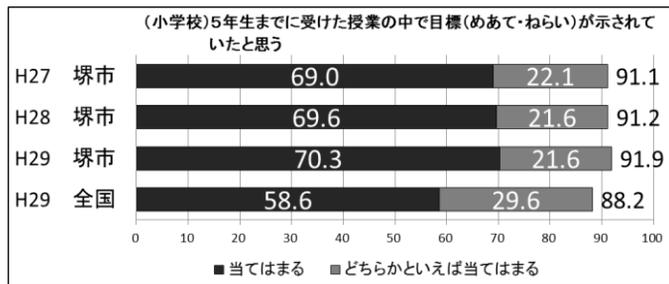
◆増加する携帯電話やスマートフォンの使用時間 ~家庭や地域と連携した指導を進める~

携帯電話やスマートフォンの使用時間では、1時間以上使用している児童生徒の割合は、小学校で21.3%、中学校で56.8%と、昨年度に引き続き、全国を大きく上回っている。子どもたちが、自らの生活習慣、コミュニケーションの取り方、情報との関わり方を問い直し、自らの行動を律する力を身に付けるため、学校・家庭・地域が丸となって指導を進める必要がある。



◆ 堺版・授業スタンダード ～子どもが考える授業改善を一層進めていく～

「堺版・授業スタンダード」に基づいた「課題をつかむ、集団で考え、表現する、学習をふりかえる」活動において、小学校では全国平均を上回っている。中学校では、年々著しく向上しているものの全国平均には及んでいない。学習の意欲や思考力・判断力・表現力を向上させるために、今後も子ども自身が能動的に学び、考える授業改善を進めていく必要がある。



◆ 宿題+αの主体的な家庭学習 ～勉強時間が30分より少ない児童生徒が全国より多い～

中学校で「全くしない」生徒の割合が昨年度よりも1.6P減少しているが、小中学校ともに30分以下の児童生徒の割合がまだ全国よりも高い。宿題に加えて、授業の復習など家で学習する習慣を定着させることは、自ら学ぶ姿勢や生涯学び続けようとする態度の育成につながる。自主学習ノートを活用し、家庭学習と関連づけた授業づくりに取り組むとともに、家庭との連携を引き続き強化する必要がある。

